



弘前市出身・仙台市、東北
大学大学院理学研究科教授



41

千葉 権司

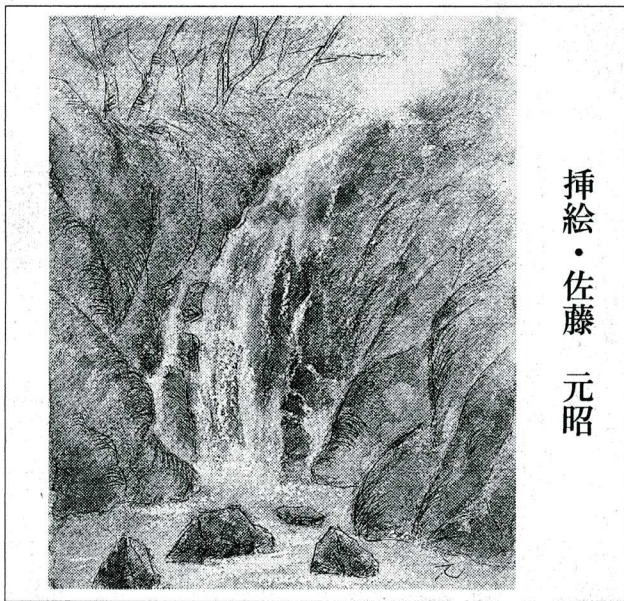
冬の津軽地方は曇りや降雪の天気ばかりなので、日中は日差しにめぐまれず夜もあまり星を見ることができない。しかし、久しぶりによく晴れた夜には、凍てつくように寒く澄んだ空気の中で、星が大変美しくまたたいて見える。南の空には大きくオリオン座があり、その下には全天で最も明るい恒星であるシリウスが見える。この星は通常は夕方の一星（一番初めに見える星）であるが、最近の一星は何といっても宵の明星である金星であり、夕方の西の空に圧倒的な明るさで光っている。昔は、買ってもらった小さな天体望遠鏡をこの金星や月に向けて楽しんだ。美しい星に心を奪われて寒さを忘れたものである。

この分野を職としてからはいろんな天文台を訪れた。日本はアメリカのハワイ島に建設した「すばる望遠鏡」を持っており、私もときどき観測に出掛けて貴重なデータを取ってくる。とはいえ、そう簡単には行けない所である。まず、観測プロポーザルとよばれる申請書を提出し、観測を希望する科学的理由などをきっちりと書いて審査を受ける。限られた観測時間に対して多くの天文学者が申請するので競争率は高く、自分の申請はなかなか認められない。運よく採択されたら、いよいよ旅行（出張）準備に取り掛かる。まず、日本からホノルルまで飛び、そこで飛行機を乗り換えてハワイ島に飛ぶ。島についたら直ちに車で望遠鏡がある標高4200mのマウナケア山に向かう。しかし、いきなり山頂に行くと高山病になる恐れがあるので、標高3000m付近にある宿泊施設に調整のため1泊

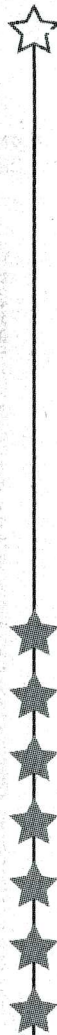
夜空ノムコウ

し、次の日から観測に取り掛かる。夕方に宿泊施設から山頂に上がると、雲が視線の下にありその向こうに大変美しい夕日を見ることができる。それこそ別世界である。空気が薄くてボーっとした状態のなかで観測に取り掛かる。望遠鏡をのぞくというよりは、コンピューターのスクリーンを見ながらデータをチェックしたりする作業が主であり、次の日の明け方まで観測を続け、その後山頂から宿泊施設に帰って寝ることになる。去年は南米のチリにある天文台にも行く機会があり、片道30時間ぐらいいもかかった大変な長旅であったが、アンデス山脈をバックに広大な自然と夜空に光る星を見ることができた。

世界のどこに行っても、見える星は同じものである。実家の裏庭で凍えるような空気の中で見たオリオン座が、見える方向が変わっても全く同じ形をして夜空に横たわっているのを確認し安心する。



挿絵・佐藤 元昭



自
加
ウ
ウ
篤史、イラストは横ヨ